



## わかちあいプロジェクト NEWS No.9

1997 May



カレンの村人 たばこを作っている

### 忘れられないことばー"Economic Bombs"

松木 傑

タイ、北西の都市チェンマイで社会活動をしている人や大学の先生たちとの懇談会で発言をいまでも印象深く覚えています。それは若いタイの人から発せられた「Economic Bombsー経済の爆弾」という言葉でした。タイは経済発展の目覚ましい国で、バンコックは都市化のため交通渋滞が問題になっています。

一方、タイの東北地方やチェンマイから北の山岳の少数民族の人たちは経済発展の恩恵から取り残されているばかりか、経済の力のマイナス面の被害を受けています。電気が引かれると都会の「消費主義」の波が、どっと押し寄せ、村の人たちはこの経済の爆弾に抵抗できなくなり、

その結果、貧しい村びとは自分の娘たちを売ったお金で冷蔵庫やテレビを買うということが起こっているのです。村の教会の課題や問題は何かと私の問いかけに、神学校の先生が、教員が娘を売るということをあげられたときには、その深刻さにどうしようもない思いになりました。

毎日のコマースシャルにより素朴な村人を誘惑するのは、多くは日本の電化製品やバイクや車なのです、しかし、その営業活動がある人たちにとっては破壊的な役割をはたしていることにどれだけの日本人のたちが気付いているのでしょうか。

### なぜタイのコーヒー

昨年の11月、タイ北部のカレン族の村を訪問しました。7年前に研修旅行でカレンの村を訪れ、民家に一泊させていただきましたが、その時、庭先に植えられたコーヒーの木と乾燥中のコーヒー豆を思い出したからです。

1993年にコーヒーを扱うようになってから、カレンの村から安定的にコーヒーを買うことにより、村の生活向上に役立っているのではないかと考えて、以前から連絡していたチェンマイのバヤップ大学、農村開発研究所にお願いして1995年にコーヒーのサンプルを取り寄せました。

コーヒーの質と味については大丈夫との確信を得ましたので、コーヒーの収穫時期にあわせて研究所のシン博士案内で、長年、カレンの村で農業指導を行い、20年も前にコーヒー栽培を村ではじめたアメリカ人宣教師のマンさんをチェンマイ市の北西70キロの山岳の村ボガオに訪ね、コーヒー栽培の実態について見学しました。マンさんの話ですと、害虫のこともあり無農薬、有機栽培は難しいことでした。そのためマニュアルを探して送ることになっているのですが、私も見つけずじまいになっています。それから、国立チェンマイ大学の高地コーヒー研究・開発センターを訪れ、北部タイへのコーヒー導



250グラム入り 詰め、真空パックでなくエージレス入り



届いたばかりのコーヒー豆

入が、1972年から1979年まで国連の作物転換とコミュニティー開発プロジェクトにより、あへん、けしに代わる換金作物として本格的に取り上げられ、その働きを同センターが引き継いでいることを教えられました。センターは二つの実験農場をもち年間、約5トンのコーヒーを収穫しています。北部タイの山岳地帯全体での年間の生産高が400トンということですから、中南米のコーヒー生産者と比べると規模が大変小さいことがわかります。マンさんは教会の敷地（山地では土地の個人所有は認められず、使用が認められている）で500キロのコーヒーを栽培していますが、彼の現在の主な働きは、麻薬中毒患者の更正とリハビリのための「新しい希望の家」の運営です。

コーヒー園での農作業はリハビリの一環として取り入れられているそうです。麻薬中毒は、山岳地域の少数民族の最も大きな社会問題です。カレン族の八つの村とモン族の一つの村で行われた最近の調査によると、426人の人が麻薬中毒で、その人数は、1才以上の村人の14%に相当するとのこと。麻薬、こども売春などの問題は、直接、間接に貧困や、教育の欠如（小学校は村にあるが、中学校は町にあり、寮生活をしなくてはならず、30%しか中学校に入れない）によるのではないのでしょうか。

帰国後、買入れの準備を行い、マンさんから400キロ、チェンマイ大学の農園から6000キロ、合計1トンを4月に輸入しました。量が少ないので品切れになってしまってもいいですが、ご購入ください。

第一コーヒー（株）の高橋社長は、「酸味と苦味のバランスのいい、整った味」との推奨です。有機栽培への転換を勧めたいと思いますが、現在のものは残念ながら、無農薬、有機栽培ではありません。

「タイのコーヒーが、将来彼らに役に立つことを願っています。」(松木)



右からマンさん、藤田君、運転手のスザクさん、シンさん、集められたフェロ 1996.11 マンさんの農園